

星の凶鑑 開成高等学校

あはき雪濃き雪のあり初詣

山眠る髪のかわいてゆく匂ひ

温室が欠伸のやうに続きけり

空き瓶のうすぐもりより蝶生まる

春雷や買はぬつもりペン試し

大いなる闇あり女王蜂と呼ぶ

はるかなるもの束ねんと風船売

知らぬ草ふたすぢ混じるうまごやし

聖五月羽のごとくに茶葉沈み

鉛筆は刃に痩せて椎の花

自画像に髭すこし足す青嵐

蚊帳の中星の凶鑑をたづさへて

少年の磨く石塊百日紅

日盛の大河の濁りゆく音か

こんなにも兄のはるけき泳ぎかな

桃の香の中にピアノの古びけり

塵取りにうつすらと水白木槿

衣被或る美しき顎を思ふ

止みてなほ傘の一回あきざくら

冷やかやささはさと花踏んできて

キーパーに独りの時間鳥渡る

山茶花や耳鼻科の道をとうに忘れ

ラガー等のずんずん影を濃くし合ふ

東京や雨の聖樹に肩触れて

踏切の向かうのポインセチアかな